

大劇場で悲劇の主人公を演じ続けるためには  
—1814年のエドモンド・キーンによる名声維持のための  
*Hamlet* と *Othello* 上演—

松山 響子\*

To Keep on Playing the Tragic Hero on a Big London Stage  
—Edmund Kean's Attempt in Keeping His Fame by Playing *Hamlet* and *Othello* in 1814—

Kyoko MATSUYAMA\*

Abstract

Edmund Kean made his debut on the London stage playing Shylock from Shakespeare's *Merchant of Venice* in January 1814. Shylock was swiftly followed by Richard from Shakespeare's histories *Richard the Third*. By playing these two roles he has made a name in London. However to be able to keep performing on a big London stage Kean had to continue producing successful reviews in each of the roles he will perform in front of London theatre critics and audiences. His attempt in securing the lead position was clear in the choice of roles he would perform after Shylock and Richard : which was Hamlet. Hamlet is still considered as a role that shows the actor's true ability in acting. And Kean's attempt in playing Hamlet was a miserable failure: especially in the eye of the theatre critics, although frocks of audiences gathered to the theatre. But they were there to see Kean not Hamlet. And to make up for that failure he chose another role that he thought would revive his assessment as an actor which was Othello. Yet Othello and Hamlet is a character with somewhat shared qualities and the result was as expected. To revive his two failed attempts Kean's next choice of character was Iago from *Othello*. In choosing a character that has shared qualities with Shylock and Richard of course brought success which was easily granted. Yet by playing a similar role showed Kean's limited quality as an actor which would have been taken as a risk if he wanted to keep his position as an leading London actor. However Kean was ready to embrace this risk and face the consequence from that choice.

1. 18世紀末のロンドン演劇界

18世紀末、ロマン派の詩人や評論家たちが活躍した時代は、同時に17世紀王政復古後に復活

した劇場の伝統が連綿と続いていた時代でもあった。劇場にはランク付けがされ、悲劇を含めた様々な演劇が上演できたのはシアター・ロ

---

\*人文学部 国際文化学科

イタル (Theatre Royal) と呼ばれる勅許劇場のみであった。この勅許劇場という制度はロンドンだけではなく、イギリス全土において適用されていた制度であった。同時にシアター・ロイヤルがあるのは一定以上の規模の都市に限られていた。このような時代、成功した役者とは地方のシアター・ロイヤルから引き抜かれロンドンのシアター・ロイヤルで主役を演じる役者になり、そののちシアター・ロイヤルの劇場支配人となった者のことであった。

18世紀末から19世紀初期のロマン派の時代には上記のような形で成功した二人の役者がいた。一人はやはり役者として成功した姉、シドنز夫人 (Mrs. Siddons, 1755-1831) を支え、自らも長年舞台の上で数多くの主役を演じ、最終的にロンドンの二大勅許劇場ドルリー・レーン (Theatre Royal Drury Lane) とコベント・ガーデン (Theatre Royal Covent Garden) で役者兼劇場支配人を務めたジョン・フィリップ・ケンブル (John Philip Kemble, 1757-1823) とドルリー・レーンで主役を数多く務めたエドモンド・キーン (Edmund Kean, 1787-1831) である。二人の役者が同時にロンドンで活躍していた時期は、ごく限られている<sup>1</sup>。だが18世紀末から19世紀初頭のロンドンの演劇において時代を代表する役者であった。

最初にロンドンで活躍をしていたのはケンブルである。彼は1783年にドルリー・レーンの舞台でハムレット役を演じてデビューをし、18世紀を代表する俳優デビッド・ギャリック (David Garrick, 1717-1779) の後継者として18世紀末のロンドンで順調にキャリアを重ねていき、ドルリー・レーンとコベント・ガーデンの両方で劇場支配人を務めあげ1816年に引退をした。姉のシドنز夫人は生涯女優の名をほしいままにし、ロマン派を代表する批評家であるウィリアム・ハズリット (William Hazlitt, 1778-

1830) が『イギリス演劇界観覧』 (“A view of the English Stage”) の中で「悲劇を体現している」と語っている。彼は姉とともに舞台のキャリアを築いていった。シェイクスピア上演に関しては、『マクベス』を17世紀以降に流行していた改作版ではなく、シェイクスピア再評価の機運に乗じるネッサンス期のシェイクスピア脚本に戻したものを上演したことで知られている。人気、実力ともに確固たる力を持っていたケンブルの演技方式を信奉し真似る役者は多く、やがてケンブル派 (Kemble school) と呼ばれる一派を生み出していった。このケンブル派式の演技に対抗したのがエドモンド・キーンである。

## 2. 一夜にして得た名声—シャイロックとリチャード三世—

エドモンド・キーンは幼いころから舞台に立っており子役として一時期ドルリー・レーンの舞台にも立っていた。しかし成長して地方回りをしたのち、シアター・ロイヤル・エクセター (Theatre Royal Exeter) での演技が評判となった。財政状況の悪化に苦しんでいたドルリー・レーンの経営陣が、1814年、彼の評判を耳にし、役者として招いた。このときキーンは27歳であった。だが、その当時のキーンは劇場の経営陣が経営再建のために満を持してドルリー・レーンに呼んだ俳優ではなかった。彼は劇場側が少しでも経営改善の一助と考え声をかけた数多くの俳優のうちの一人でしかなかった。このように、あまり期待をされていない状況の中、キーンは1814年1月27日にドルリー・レーンの舞台に、成人した俳優として再登場を果たした。この時に演じたのがシェイクスピアの『ベニスの商人』のユダヤ人の金貸しシャイロックであった。当時、観客のほとんどをコベント・ガーデンに取られていたドルリー・レーンでは、

キーンの前夜も開演直後は観客数が少なかったが、時間を追うごとに観客が増えていった。その開演直後から舞台を見ていた数少ない観客の中に、批評家のハズリットが含まれていた。

キーンの前夜を目撃した批評家は二人いた。そのうちの一人「モーニング・ポスト」紙（“Morning Post and Daily Advertiser”）の批評家が掲載した劇評は、短く淡々とキーンの前夜の姿を記録しただけであった。しかし、もう一人の批評家「モーニング・クロニクル」紙（“Morning Chronicle and London Advertiser”）の批評家ハズリットは、自らの熱狂あるいは興奮が最初の数行で大変よく伝わってくる劇評を残している。

Mr. Kean (of whom report had spoken highly) last night made his appearance at Drury-Lane Theatre in the character of Shylock. For voice, eye, action, and expression, no actor has come out for many years at all equal to him. The applause, from the first scene to the last, was general, loud, and uninterrupted.

キーン氏（報告によれば大変高評価を得ているのだが）は昨夜ドルリー・レーン劇場にシャイロックの役で登場をした。その声、眼差し、挙措と表現力は、彼と同じ実力を持ち得る役者が長い間登場していないことを実感させてくれた。彼が登場していた最初から最後まで拍手は惜しみなく、大きく、そして途切れることなく続いていた。（Hazlitt179）

特に「その声、眼差し、動きと表現力は、彼と同じ実力を持ち得る役者が長い間登場していな

いことを実感させてくれた」という個所から、ハズリットの熱狂ぶりと当時規範とされていた演技へのハズリットなりの評価と意識がよく伝わってくる。また五日後の2月2日に再び「モーニング・クロニクル」紙に掲載された劇評でも、ハズリットはキーンの前夜の演技を多少の批判を加えつつも、再度絶賛をしている。

Mr. Kean appeared again in Shylock, and by his admirable and expressible manner of giving the part, fully sustained the reputation he had acquired by his former representation of it, though he laboured under the disadvantage of a considerable hoarseness. (...) His style of acting is, if we may use the expression, more significant, more pregnant with meaning, more varied, and alive in every part, than any we have almost ever witnessed. The character never stands still; there is no vacant pause in the action; the eye is never silent.

キーン氏は再びシャイロックとして登場し、実に見事にそして表現力豊かに役を演じあげた。かなり声がかすれてしまっているという不利な状況の中で、自らが獲得した評判を持続させたのだ。[中略]彼の演技は（この表現方法を使うのが正しいのならば）、今まで目にした誰の演技よりも、大変示唆的で、大変深い意味を持ち、あらゆる部分において、大変変化に富み生き生きとしている。彼の演じた役は棒立ちになることなく、また、意味のない間を取ることもなかった。そしてその眼差しは決して沈黙をしないのだ。（180）

そしてこの記事では「役の構想や深みにおいてはキーン氏よりも好ましい役者たちは目にしてきたが、その演技の素晴らしさと見事さにおいて彼に並ぶものはない」(180)と、前回に引き続き最上位の賞賛をキーンに与えている。そして、また「より好ましい俳優たち (actors whom we should prefer)」と書き“actors”と複数で示されている俳優の一人がケンブルであることは、この直後にハズリットがキーンは「ケンブルが完璧になるために必要なあらゆる要素を持っている」(180)と記述したことで明確になっている。

キーンによるシャイロック上演に関する記事を読む限り、ハズリットのキーンに対する期待が非常に高いことが伝わってくる。そして、2月2日の記事では結びに「リチャード三世を演じるキーンを観てみたい」と強い期待を込めて書いていた。果たしてその期待は裏切られなかった。

エドモンド・キーンがその生涯の中で最も数多く演じた役柄は『リチャード三世』の主役リチャードであった<sup>ii</sup>。しかし初めてリチャードを演じた2月13日、キーンはひどい風邪をひいており、それを知っていた「モーニング・クロニクル」紙は、翌日の紙面に以下のように慎重だが好意的な批評を乗せている。

he performed the character (one of the most arduous on the stage) with admirable spirit and effect. He was crowned with universal applause. We are compelled by the pressure of the matter to postpone our remarks till to-morrow.

彼は（舞台上において最も困難な）役を實に見事な精神力と効果で演じきった。彼は惜しみない拍手を送られた。我々はこの事

態へのプレッシャーから判断を明日まで持ち越すことにした。

体調が万全でなかったにもかかわらず、批評家の期待に応える演技をしたことは「彼は（舞台上において最も困難な）役を實に見事な精神力と効果で演じきった。」の一文からよく読み取ることができる。またリチャード役が「舞台上において最も困難な役」と批評記事の中で明記されていることから、体調が万全の場合であっても演じる役者にとっては好意的な評価を得ることが難しい役である、という印象を批評家が抱いていたことは疑いが無い。しかし記事の中で「實に見事な精神力と効果で演じきった」と明記していることから13日の公演時にキーンの体調が良ければ素晴らしいリチャードを見られたはずであるという確信を批評家が抱いていたことを読み取ることができる。事実、翌日の公演でキーンはハズリットら批評家の期待を裏切らなかった。

1814年2月14日にハズリットが書いたキーンのリチャードの演技に関する劇評は称賛にあふれていた。ハズリットは、キーンがロンドンに成人の役者として初登場をした瞬間からキーンの演技の支持者であり、かねてよりキーンが次に演じるべき役としてリチャードを挙げていた。今回その期待にキーンが応え、ハズリットは大いに興奮していたことも読み取ることができる。

Mr. Kean's manner of acting this part has one peculiar advantage; it is entirely his own, without any trace of imitation of any other actor. He stands upon his own ground, and he stands firm upon it. Almost every scene had the stamp and freshness of nature. (...) It is possible to form a higher conception of this character

(we do not mean from seeing other actors, but from reading Shakespeare) than that given by this very admirable tragedian; but we cannot imagine any character represented with greater distinctness and precision, more perfectly *articulated* in every part.

キーン氏はこの役を演じるうえで一つ優位に立っていることがある。それは彼の演技は彼だけのもので、他の役者の真似をしている部分が全くないということだ。彼は自分だけの立ち位置を確保し、その上にどっしりと立っているのだ。ほぼすべての場面において、その足跡は歴然と残り、また本質的な新鮮さがあった。〔中略〕この素晴らしい悲劇役者が演じた役に、より高度な概念を付与することは可能であるが（これは他の役者を見て得た感想ではなく、シェイクスピアを読んで得た感想である）、しかし我々は、これ以上の明瞭さと精密さ、あらゆる箇所で完璧に表現されたこの役を想像することができない。(180-81)

ハズリットはキーンのリチャードを絶賛したが、自らがシェイクスピアの原文を呼んだ際に文学者として作り上げた理想のリチャード像があった。キーン演技は彼の理想像からは、なお隔たりがあったのである。他紙の劇評を見ていくと、キーンがかつて所属していたシアター・ロイヤル・エクセターのある地域で発行された新聞で、キーンがエクセターのシアター・ロイヤルでも主役を務めた『リチャード三世』がロンドンで絶賛されている様子が2日遅れの2月16日の「トルーマンズ・エクセター・フライング・ポスト」紙（“Trewman's Exeter Flying Post or Plymouth and Cornish Advertise”）に掲載

された。そこにはロンドンにおける観客の熱狂が次のように書かれていた。

Mr. Kean, who has performed the part of Shylock at the Theatre- Royal, Drury- Lane, six nights, with increased attraction, appeared on Saturday in Richard the third, to one of the most crowded houses the season has had to boast.

シアター・ロイヤル・ドルリー・レーンでシャイロック役を六夜にわたって日々観客が増える中で演じたキーン氏は、リチャード三世役を今シーズン最高の集客数の中で土曜日に演じた。

さらにその劇評にはロンドンの他紙に書かれていた非常に詳細な劇評の引用がなされており、一時とはいえエクセターのシアター・ロイヤルに所属をした後にロンドンで成功をした俳優に対し、エクセターの読者あるいは観客もまた非常に強い興味を抱いていたことが強く伝わってくる。

キーンによる二回目のリチャード上演の際も批評家による高い評価は変わることはなく、2月21日の「モーニング・ポスト」紙もジョン・フィリップ・ケンプル以前にシェイクスピア役者として名声を確立したデビッド・ギャリックの名を引き合いに出していた。

Garrick, though rather under the middle size, had such extraordinary and admirable expression of countenance, that he was never though waning in importance; Mr. Kean may lay claim to similar praise. Though as short as Garrick, there is certainly nothing of insignificance in his

appearance.

ギャリックと背は中背よりも低かったが、並はずれた、そして素晴らしい姿かたちで表現していたので、決して貫録を必要としていなかった。キーン氏も同じような賞賛を得ることができるだろう。ギャリックと同じように身長は低いが、彼の姿かたちに關して卑しい部分はない。

これはキーンがギャリックと同様、身体的に恵まれていないが、観客から絶賛されうる可能性を持っていると示唆することで、キーンの演技力の高さを表現している。この記事では明確にケンブル以前の名優ギャリックが引き合いに出されており、キーンの演技がギャリックと同等、あるいはギャリック以後のシェイクスピア上演の舞台を代表する役者であるケンブルに相当する実力があるとロンドンで認められた瞬間であったともいえる。このことはリチャードを演じるキーンに関して二度目の劇評を掲載したハズリットが劇評の結びに以下のように述べたことからわかる。

Who is there that will stand the same test? It is, in fact, the last forlorn hope of criticism, for it shews that we have nothing else to compare him with. 'Take him for all in all,' it will be long, very long, before we 'look upon his like again,' if we are to wait as long as we *have* waited.

いったい誰が同じ位置に立って彼に対抗できるだろう？これはある意味で批評のはかない望みなのかもしれない。なぜなら、彼に比肩する者が存在しないからだ。「彼のすべてを、ありのままに受け取れ」、なぜ

なら「彼と同じような役者を目にする」には、非常に、非常に、長い時間がかかるのだから。彼が登場するまで、我々は長い間待っていたのだから。(Hazlitt, 184)

キーンのような役者がなかなか登場しないことを強調している点からも、ハズリットがキーンを今後ロンドンの舞台でケンブル以上の存在となる役者として見なしていたことは間違いない。同時にキーンにとっては、この人気と評価を確固たるものにしていく必要性を感じたとみなしでもおかしくないであろう。なぜなら、主演を務めた『ベニスの商人』と『リチャード三世』の公演が大成功を収めていたとしても、それだけではロンドンで成功した役者とはみなされないからだ。ケンブルのような成功を目指すには、常に成功し続ける必要があった。そのためには様々な演目で主役を演じ続け、観客と批評家からの高い評価を受け続けなければならなかったのだ。

### 3. 名声確立への挑戦と失敗—ハムレットの上演

華々しいデビューを飾ってから一か月半の間にシャイロック九回とリチャード八回を演じて一気にロンドンでの名声を得たキーンは、次にロンドンのシアター・ロイヤルに立ち続ける俳優としての地位を確保する必要が生じた。デビュー直後に演じたシャイロックとリチャードという役は、悪人として舞台に登場し最終的にみじめな最期を迎えるという明確な個性を共有している。しかし、同種の役を演じ続けても、得られる評価が大きく変わることはない。また同じものばかり演じていては安定した評価を得ることはできるが、同時にその安定した評価が役者としての可能性を広げたり、あるいは役者としての地位を維持したりするとは限らないからである。そして、何よりライバルとしてたびたび名前を引き合いに出されていた俳優のケン

ブルは幅広い役柄を演じることができ、長いあいだ名優の名をほしいままにしていたのである。そのケンブルにライバルとして常に名前を挙げられるようにするには、同種の役のみを得意とする俳優以上の存在にならなければ難しかったのである。

キーンが自らの役者としての地位を維持するために次に演じたのはハムレットである。ハムレットはキーンが主にロンドンで活躍していた1821年までの期間のうちに三十回ほど演じた役である。しかしその半分以上が1814年から15年にかけての一年間に集中している。このことから、キーンが1815年以降に演じた他の演目のほうが観客への評判が良かった、すなわち、ハムレットの評判が悪く、そのち多く演じられたオセローやイアーゴの評判が良かったということが推測できるのではないだろうか。事実、1814年3月14日のハムレット公演におけるハズリットの劇評は、一応キーンの演技を「キーン氏はこの役に新たな解釈を見出したようだ、と言われている。我々はこの解釈が完璧に正しいと考える。」(188)と一見評価しているように見えるが、以下のようにキーンの本質の問題点を強烈に指摘している。

If it was less perfect as a whole, there were parts in it of a higher cast of excellence than any part of his Richard. We will say at once, in what we think his general delineation of the character wrong. It was too strong and pointed. There was often a severity, approaching to virulence, in the common observation and answers. There is nothing of this in Hamlet. He is, as it were, wrapped up in the cloud of his reflections, and only *thinks aloud*. There should therefore be

no attempt to impress what he says upon others by any exaggeration of emphasis or manner, no talking *at* his hearers. There should be as much of the gentleman and scholar as possible infused into the part, and as little of the actor.

彼が演じたりチャードのあらゆる部分と比較すると一部においては非常に評価の高い部分があったが、全体的に見て完璧ではなかった。でも端的にいうと、我々は彼の役の描写が間違っているとしか言えないのだ。何より強すぎて、そして先鋭的すぎるのだ。しばしば、少し間違うと憎悪になるような苛烈さが通常の受け答えの中に感じられた。このようなものはハムレットの中に存在しない。彼は、自分の内省の雲の中に包み込まれて、自らの考えを声に出しているだけなのだ。それ故に、彼自身の発言が他者に感銘を与えるように強調されたり、あるいは表現されたりしてはならず、また彼の語る言葉は他者に向けて発せられているものではないのだ。この役には紳士と学者の要素ができる限り命を吹き込まれていなければならない、役者本人が反映されてはならないのだ。(187)

特に「このようなものはハムレットの中に存在しない」という評価と「この役には紳士と学者の要素ができる限り命を吹き込まれていなければならない」という指摘は、俳優の特質が見え隠れするのが特徴であるキーンの演技がハムレット役者としての演技にふさわしくないという痛烈な批判である。同日の「モーニング・ポスト」紙にも「台詞の中に非常に強固な精神が表現されていた。そして彼の表しているものは彼自身が

考え出したものである。これは彼の外見が問題だというのではない。しかしながら、全体の感想を言うと、完璧なものとは言えない」と掲載されている。このことからキーンの演じたハムレットが芳しくない出来であったのは、新聞に劇評を書いている批評家の共通の認識であったと言えよう。そして3月19日の「カレドニアン・マーキュリー」紙（“Caledonian Mercury”）にも「キーン氏には印象的な台詞や重要な台詞を語る際に、賢明な独自性が期待されていた。しかし全体的に見て、彼のハムレットは我々の時代の偉大な規範と同等あるいはそれに近づけるようなものではなかったと言えよう。」と評されている。これによりキーンのハムレット上演の評価がハズリットだけが感じていたものではなかったと証明されてしまったのである。そして「カレドニアン・マーキュリー」紙で言及されている「偉大な規範」であるケンブルには同等どころか、足元にも及ばないものであると書かれているも同然であった。

Mr. Kemble's personification of this character has long passed for a standard of excellence scarcely ever to be equalled, never to be surpassed. All others that we have seen make the attempt, had failed altogether; or were successful, only in proportions as they imitated or resemble Kemble.

ケンブル氏のこの役の具現化は長い間に渡り、並び立つものがない、そしてそれを凌駕するものがない傑出した演技の規範と考えられている。我々が目にしたことのある役者は、全員が全員挑戦をするが、誰もがみな敗北していくのだ。たとえ成功するものがいたとしても、それはほんの一部に対

する成功である。なぜならば、それらはみなケンブルの真似をしているか、ケンブルにどこか似ているからだ。

ケンブルがシェイクスピア劇において大変人気があったことは前述したが、特にハムレットとマクベスの演技においては非常に高い評価を得ていたことは、活躍した1784年から1816年までの期間の中でこの二役を演じていた回数が突出して多かったことからわかる<sup>iii</sup>。そして、このハムレットの上演に関する批評を見る限り、キーンのハムレットは、ケンブルの演技に比べると足元にも及ばないと評され、彼が演じたシャイロックやリチャードほどの満足感を観客に与えなかったのは明らかである。ただ、観客はシャイロックとリチャードを見た直後の印象が強く、たとえ失敗をしたとしても少しでもケンブルのハムレット像と違ったもの、新たなものを見せてもらえるのではないかという期待をキーンに抱いていたことは、劇評の中の観客が劇場に押しかけていた描写からも明らかである。実際、初演以降のハムレットの上演は初演時の劇評に書かれていた批判を受け入れ、ある程度改善された演技となっていたようである。このことは批評家たちを満足させたようで二回目のハムレット公演後の3月21日付の「モーニング・クロニクル」紙には次のように書かれていた。

Mr. Kean had improved on his first performance from the observation of his friends. He was less sarcastic and less vehement in the expression of particular words;

キーン氏は彼の友人の目から見ると、初演と比較して進歩はしている。一部の台詞で



は皮肉や激烈さは影を潜めている

また22日付の「ジャクソンズ・オックスフォード・ジャーナル」紙（“Jackson's Oxford Journal”）では、その劇場でキーンの人気を物語る一文を劇評に掲載している。

Mr. Kean performed *Hamlet* for the second time Saturday, to a house overflowing in boxes, pit and galleries (...)  
Mr. Kean is an admirable performer (young as he is), full of genius and promise, and likely to become a capital ornament in the stage.

土曜日にボックス席や平土間席、そして最上階まで人であふれかえった劇場でキーン氏は二度目の『ハムレット』を演じた。〔中略〕キーン氏は（あの若さで）素晴らしい俳優である。才能と可能性に満ち溢れ、舞台において欠かすことのできない人物となるであろう。

ある意味でこの記事は一時的に人気の出たキーンの現状を物語っていると同時に彼の持つ可能性を述べることでハムレットの上演が失敗だったと示唆している。「イグザミネー」紙（“The Examiner”）にはその劇評の中でキーン批判に対するキーンの支持者による詳細な反論を掲載している（*The Examiner*, No.168, pp204-6）。そしてキーンの支持者は彼の演技を「新しい解釈（New Reading）」であると評している。しかし、これはあくまでキーン支持者からの支持表明であって、批評家の支持を得たわけではない。批評家から見て、失敗に終わったハムレット上演後のキーンは、まだシャイロックとリチャードを今までに無い解釈で演じた新進の俳

優ではあったが、引き続き地方からやってきた「ぼっと出」の俳優にしか過ぎなかったと言えるだろう。そして「ぼっと出」の俳優のままでは、ロンドンの大劇場の舞台に立ち続けることは難しいと言える。なぜなら、いつ同じように今までにない演技のできる「ぼっと出」の別の俳優に自らの地位を脅かされるかわからないからだ。

#### 4. 名声の確立と適した役の発見—『オセロー』の上演失敗と成功

リチャードとシャイロックで好意的な批評を得たのち、自ら選んで主演したハムレットではエドモンド・キーンは思ったように評判を確保することはできなかった。1814年の3月12日にハムレットに挑戦をした後は、5月3日までの間に十七回ドルリー・レーンの舞台に立っているが、3月12日以降ハムレットを五回、リチャードを六回、シャイロックを五回演じている。しかしハムレットに関しては二回目の公演以降の記事がないことから、三回目以降の公演に目新しい変化が感じられなかったと推測できる。その後、新しい挑戦として選ばれたのは『オセロー』である。そしてこの時の記録を見ると、キーンはオセローとイアーゴを日替わりで演じている。初めにオセローをロンドンで演じたのは5月5日、そして2日後の7日にイアーゴを演じた。オセローへの批評はハムレット同様芳しいものではなかった。ハズリットはオセロー初演の劇評を次のように書き記している。

His success was fully equal to the arduousness of the undertaking. In general, we might observe that he displayed the same excellence and the same defects as in his former characters. His voice and person were not altogether

in consonance with the character, nor was there throughout, that noble tide of deep and sustained passion, impetuous, but majestic, that 'flows on the Propontic, and knows no ebb,' which raises our admiration and pity of the lofty minded Moor.

彼の成功はその困難な役に取り掛かったことに対するものである。簡単に言うと、我々は彼が以前に演じた役で見せたものと全く同じ成功と問題点を観せられたのである。彼の声と姿かたちは役とまったく調和していなかったのである。あるいは役を演じている最中に、激しく、そして荘厳でありながらも、深く一定に保たれた情熱の波を目にすることもなかった。「ポンテック海の流れのように、逆流しない」かのごとく堂々とした精神を保ったムーア人への崇拜と憐れみを感じさせなかったのだ。(189)

この中で「以前に演じた役」(“former character”)とあるのは直前に新たな役として挑戦をしたハムレットを指していることは「彼の声と姿かたちは役とまったく調和していなかったのである。あるいは役を演じている最中に、激しく、そして荘厳でありながらも、深く一定に保たれた情熱の波を目にすることもなかった。」という批評から間違いのないであろう。また、この劇評はオセローを演じるのにキーンの俳優としての資質が向いていないと明確に評している。そして劇評はキーンの描き出したオセロー像の問題点を「ムーア人への崇拜と憐れみを感じさせなかったのだ。」と指摘している。それはキーンが演じるオセローは副官に陥れられて嫉妬に狂っていく気高いムーア人には見えないということである。ハムレット初演時の批

評に比べると好意的であることは読み取れるが、全体として見た場合は失敗であったことは明白である。好意的に評価されていた部分は、「第3幕の後半は、深遠な哀しみと素晴らしい構想が練られた傑作である、そして劇場内の興奮に強い影響を与えた。」とある。確かにハムレット初演時の批評に比べると好意的な批評であるが、デビューをした時のシャイロックやりチャードを演じた時ほどの手放しの絶賛というわけではない<sup>iv</sup>。これは他の批評も同じで5月6日の「モーニング・ポスト」紙や5月15日の「イグザミネー」紙でもハムレットの時と同様の評価を下している。

対照的だったのはオセローの二日後に演じたイアーゴの批評であった。このキーンによるイアーゴ初演の劇評にハズリットは絶賛の言葉を送っている。

The part of Iago was played at Drury-Lane on Saturday by Mr. Kean, and played with admirable facility and effect. It was the most faultless of his performances, the most consistent and entire. Perhaps the accomplished hypocrite was never so finely, so adroitly portrayed—a gay, light-hearted monster, a careless, cordial comfortable villain. The preservation of character was so complete, the air and manner were so much of a piece throughout, that the part seemed more like a detached scene or single *trait*, and of shorter duration than it usually does. The ease, familiarity, and tone of nature with which the text was delivered, were quite equal to anything we have seen in the best comic acting. It was the least overdone of all his parts,

though full of point, spirit, and brilliancy.

土曜日にキーン氏はドルリー・レーン劇場でイアーゴの役を演じた。そしてそれは素晴らしい流暢さと効果でもって演じられていた。彼のもっとも完全な演技で、最も安定して完成したものであった。もしかしたら、今まであれほど完璧な偽善者が、あれほど見事に、そしてあれほど巧妙に演じられたことはないだろう。朗らかで、軽やかな怪物、無頓着で、誠心誠意、機嫌の良い悪党はいないだろう。役の状態はこれ以上完璧なものはなく、醸し出す雰囲気も、挙措も、徹頭徹尾、素晴らしいものであった。あたかもその場面のみが独立し、あるいはただ一つの特徴のみが際立っていて、時間の流れが通常よりも早く感じられたのだ。台詞がゆっくりと、内容を熟知しているよう、実に自然に話されている様は、これまで目にした中で最高の喜劇的な演技であった。彼が演じた役の中で最も大仰に演じられることなく、しかし十分に先鋭的で、気魄にあふれ、素晴らしいものであった。(190)

この批評記事の中でのハズリットはキーンに対して批判的な部分がほとんどなく、絶賛でもって劇評を結んでいる。「カレドニアン・マーキュリー」紙はハズリットの劇評を転載しており、また「イグザミナー」紙の批評家は残念ながら舞台に近い席が取れず、また劇場が満員だったために声がよく聞こえない席に座っていたのと断り書きをしつつキーンのイアーゴを以下のように評している。

His *Iago* is, we think, the post perfect piece of acting on the stage; it is the most complete absorption of the man in the

character. He looked so thoroughly self-possessed, so comfortably at home in his assumed qualities, he played upon *Rodarigo* with such a contemptuous and condescending familiarity; he watched *Othello* with such an earnestness, and at the same time appeared so careless and honestly indifferent about the issue; he rubbed his hands, aside, with such a cordial satisfaction as his plot thickened, that we found it difficult to persuade ourselves that he was merely a young man who had put on a soldier's coat to play the villain for an hour or two.

彼のイアーゴは我々が考える限りで、舞台上における最高の演技であった。人[俳優]が役の中に完全に取込まれていたのだ。彼は一見すると大変冷静で、自分に与えられた性質を実に心地よく演じているようであった。ロダリーゴに、軽蔑的にそして親しみやすく無遠慮に接しているのだ。彼はオセローに熱心な眼差しを向け、同時にまるで心から発生した問題に対して無関心を装っているようであった。そして自分の計画が進むにつれ、手をこすり合わせながら、心からの満足感を味わっているようであった。我々は彼がまだ若く、そして兵士の衣装をまとい、ほんの一時間か二時間悪党を演じているのだということを自分に信じさせるのに大変苦勞した。(172:364)

台詞が聞こえない状態でありながらも、この評価を与えるということはキーンの演技は台詞が聞こえなくとも十分評価に値するものを示していたと推測できる。

すなわち、キーンは自らが演じて批評家に受

け入れられる役がハムレットやオセローではなくいことを確信したのであろう。同時に、シャイロックやリチャード、そしてイアゴのように悪役の要素をもつ役が、キーンの演技に適していることも明らかになったのである。1814年から15年にかけてキーンがオセローとイアゴを演じた回数はほぼ同数である。これは、イアゴを得意とする役者が演じるオセローを観客が楽しんでみていた可能性が高い。なぜならば、オセローを演じた後にイアゴではなく同じく悪役のリチャード三世を演じることもあったからだ。これらの上演記録から明らかにキーンは観客が自分に期待するものを理解し始めていることがわかる。そして観客が演目を目的として足を運ぶと同時に、キーン自身の特徴的な演技を目的として劇場に足を運び始めたことが明確になった瞬間でもある。キーンはここに特徴ある役者としての地位を確立したといえよう。しかしながら、その特徴は特定の役のみに限られてしまうことも同時に明らかになったのである。

## 5. 結論

1814年に、それほど期待されずにエクセターから呼ばれたエドモンド・キーンはドルリー・レーンの舞台でシャイロックを演じ、一夜にして名声を獲得した。しかし、その名声を保つためには多大な努力を必要とした。リチャードを演じたのは、シャイロックに似た役柄ゆえに、集客が期待できると予測できたからであろう。そして批評家もこのことを理解し、ハズリットなどは劇評にあからさまにシャイロックを演じたキーンにリチャードを演じるように自らの劇評の中で促していた。事実キーンの演じたりチャードはその期待に十分応えていった。あるいはその期待を上回るものであったと言えるだろう。しかし、これだけではキーンが役者としてこのままロンドンの舞台に立ち続けるのは難

しい可能性があった。そして、キーンにとってロンドンの大劇場で悲劇の主演を演じ続けるには、シャイロックとリチャード後に選ぶ役が自らの評価を決定付けることは明白であった。このままロンドンに役者としてとどまることができるか、それとも再び地方の劇場に戻り、たまに声がかかるのを待つかを決定づけるということがわかっていたがゆえにキーンは数多の役者が主演を演じており、またドルリー・レーン劇場のライバルであるコヴェント・ガーデン劇場の支配人であり役者としてゆるぎない名声を築いていたケンプルが得意としていたハムレットを選んだのは自然なことであろう。そしてキーンは同じ役しか演じられない役者は地方に戻らねばならない可能性が高いことを予測したのであろう。そのため、さまざまな役を演じられることを彼は観客に、そして批評家に証明しようとしハムレットを演じたのだ。

キーンがリチャードの次に選んだのは、ハムレットという役はシャイロックやリチャードとは対照的な役である。結果としてキーンのハムレットの公演は観客を集めることはできたが、その評価は決して芳しいものではなかった。何より批評家がキーンにハムレット役が向かない理由を明確に述べていた。そして、それらの指摘はキーンの得意とする演技法とハムレットが対極にあることを厳しく指摘をしていたのだ。演技の可能性が広い役者として自らを特徴づけようとした演目において、このような批評家の指摘は致命的であると言えよう。事実、キーンが1814年以降にハムレットを演じた回数は1814年が十一回、それ以降1820年の7年間で二十回であったことを考えると、上演回数が極端に少なくなっていることは明らかである。

そしてハムレットの上演が大きな失敗に終わった次に演じる役を考える時には、ハムレットとの共通項が少ない役を選ぶのが無難である

う。しかし、次にキーンが演じたのはシャイロックやリチャード三世よりもハムレットとの共通項が多いオセローであった。オセローの上演は観客が劇場に足を運んだという、興業的には大成功をした公演であったと言えよう。しかしハムレットと共通する要素が多いキーンのおセロー像への評価は、ハムレットと同様に厳しいものであった。だが、オセロー上演にはもうひとつ重要な役がある。それは高潔なオセローを陥れる狡猾な悪役イアーゴである。イアーゴという役は、シャイロックやリチャードなどキーンが評価を勝ち得た役に近い性質を持つ役であった。そして、オセローで厳しい評価を得た翌日にキーンがイアーゴを演じると、その演技は絶賛された。キーンが集客力を維持できる俳優であることはここにおいて証明した。またこの時にデビュー時に見せた時以上に最適な役を得たという批評を書かれたのである。そして、この時をもってしてキーンは自らが安定した評価を得られる俳優であることを証明したと確信をした瞬間であろう。そしてキーンは、同時に無理をして自分に合わない役を演じることの問題点を痛感したとも思われる。

キーンはシャイロックとリチャードの成功後に一時ハムレットとオセローを演じ役柄を広げようとした。そうすることがロンドンの勅許劇場に立つのにふさわしい花形の役者であるという評価につながると考えたからである。しかし、それは彼自身には合わない役であった。そのままハムレットやオセローのような役を演じ続ければ、やがて集客力も下がり、ロンドンからの撤退を余儀なくされただろう。そのとき、キーンは、あえて、同じような役しか演じられない役者という評価される危険を冒し、イアーゴのような役を演じ続けることを選択した。何より、様々な演技の可能性を追求するのは、十分な集客力をもつ役者であることをある程度証明した

後の方が良いと考えたのかもしれない<sup>v</sup>。1815年以降のキーンの活躍を見るならば、この時の決断の正しさは疑う余地がない。役柄に縛られる可能性があるにもかかわらず、同じような性質の人物を演じて批評家からの評価を確立したのは、優れた役者がもつ直感によるものであったのかもしれない。しかしながら、キーンは同一の評価ばかりを得ることの危険性を無視したとも言えよう。なぜなら、観客も批評家も、安定して演技を求めつつ同時に新しいものを舞台や役者に期待をするからだ。キーンは自らがそれまでのロンドンで定評を得ていた演技と違うものを示したことで人気を得たという事実をあたかも都合よく忘れてしまっていたかのようにある。キーンの演技の偏りはリチャード三世を演じた回数が他の役を演じた回数に比べて突出して多いことから明確である。観客がキーンの演技を楽しみたいという意識を利用して、自らの得意とする演技を見せることをロンドンで舞台に立ち続けるための足掛かりとするのは役者として当たり前のことと言えるかもしれない。しかし、キーンを地方の舞台から呼んだ、そもその原因であるライバル劇場の役者ケンプルのような成功を収めようと思ったのならば、キーンの行った選択は過ちであると言えよう。何故ならキーンはこの時点で自らの役の解釈の正しさを説明し、受け入れてもらうという努力を行っていなかったからだ。ケンプルとて最初から役者として成功を収めていたわけではない。しかしケンプルは自らの解釈の正しさを批評家からの評価が厳しくとも自らの演技を大きく変えることはなく批評家が納得するまで説明し続け評価を覆させたのだ。またキーンのように同じような役を演じ続けて、その評価に安住することはなかった。キーンはハムレットやオセローを演じた際の批評家による厳しい指摘を演技に反映させることで自らの役柄解釈の不安定

さを露呈させたといえよう。そして批評家の評価や観客の評価をロンドンの舞台に立ち続けるための手段としてシャイロック、リチャード、そしてイアーゴのように同種の役を演じ続けたのではないだろうか。この方法を選択したことでキーンはしばらくにあいだは舞台に花形役者として立つことはできたが、ケンプルのように長期間その評価を保つことは難しかった。そして、それはロンドンデビュー後にキーンがとったハムレット公演、そしてオセロー公演での選択によって決定づけられたのではないだろうか。

<sup>i</sup> エドモンド・キーンは幼少期に子役としてドルリー・レーンの舞台に立っていた。

<sup>ii</sup> エドモンド・キーンは主に活躍した1814年から1821年までの七年間の間にロンドンでシェイクスピア劇を三百五十回ほど演じているが、百回以上演じているのはリチャード三世のみである。シェイクスピア劇以外の上演作品で百回以上演じたものはなく、五十回以上演じたのはフィリップ・マッシンジャー (Philip Massinger, 1583-1660) の「古い借金を新しく返す方法」(A New Way to Pay Old Debts) のサー・ガイルズ・オーバーリーチ (Sir Giles Overreach) とジョン・ハワード・ペイン (John Howard Payne, 1791-1852) の「ブルータス、あるいはタルクニウスの没落」(Brutus, or The Fall of Tarquin) のブルータス (Brutus) のみである。

<sup>iii</sup> ケンプルは活躍していた二十年ほどの間に八百回ほどシェイクスピア劇を演じている。そのうちで百回以上演じたのが『マクベス』(百十九回) と『ハムレット』(百四回) である。

<sup>iv</sup> あまり高く評価されていなかったキーンのオセローではあったが二年後にウィリアム・マクレディ (William Macready, 1793-1873) がオセローを演じた舞台の批評ではハズリットはキーン

の演じたオセローと比較をしながらマクレディの批評を行っている。(Hazlitt 338)

<sup>v</sup> 事実、デビューした翌シーズン以降キーンが演じた役はマクベスであった。そしてキーンの演じたマクベスは彼のキャリアの中でリチャードに次ぐ回数演じられていたのである。

---

#### 引用文献

Hazlitt, William. *A View of the English Stage*. Ed. P. P. Howe. Tokyo: Yushodo, 1967. Print. Vol. 5 of *The Complete Works of William Hazlitt*. 21 vols. 1967  
Caledonian Mercury  
The Examiner  
Jackson's Oxford Journal  
Morning Chronicle and London Advertiser  
Morning Post and Daily Advertiser  
Trewman's Exeter Flying Post or Plymouth and Cornish Advertiser

#### 参考文献

BAKER, Herschel. John Philip Kemble, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1942  
BARTHOLOMEUSZ, Dennis. *Macbeth and the Players*, Cambridge, Cambridge University Press, 1969  
BENNETT, Susan, *Theatre Audience*, London, New York, Routledge, 1997  
\_\_\_\_\_, *Performing Nostalgia*, London, New York, Routledge, 1996  
BROWN, John, R., *Studying Shakespeare in Performance*, London, Palgrave Macmillan, 2011  
BEVINGTON, David, *The Wide and Universal Theatre - Shakespeare in Performance then & Now*, Chicago; London, The University of

- Chicago Press, 2007
- BRATTON, Jacky, *New Readings in Theatre History*, Cambridge, Cambridge University Press, 2003
- COUNSELL, Colin, Wolf, L., *Performance Analysis*, London, New York, Routledge, 2001
- DAVIES, H. Neville (ed.), *Macbeth* J. P. Kemble 1794, London, Cornmarket Press, 1972
- FINDLATER, Richard, *6 Six Great Actors*, London, Hamish Hamilton, 1957
- HACKETT, James Henry, *Notes and Comments Upon Certain Plays and Actors of Shakespeare: with Criticism and Correspondence*, New York, Carleton Publisher, 1862
- HAZLITT, William, P.P. Howe (ed.), *A View of the English Stage, The Complete works of William Hazlitt in Twenty-One Volumes*, vol.5, Yushodo Bookseller, 1967
- HAWKINS, F.W. *The Life of Edmund Kean*. London, 1869.
- HODGDON, Barbara, Worthen, W.B., *A Companion to Shakespeare and Performance*, Chichester, Wiley-Blackwell, 2005
- HOLLAND, Peter (ed.), *Great Shakespearians Garrick, Kemble, Siddons, Kean*, vol. 2, London, New York, Bloomsbury Arden Shakespeare, 2010
- HOLMES, Jonathan, *Merely Players? -Actor's accounts on performing Shakespeare*. London, Routledge, 2004.
- KELLEY, Linda, *The Kemble Era - John Philip Kemble, Sarah Siddons and the London Stage*, New York, Random House, 1980.
- KEMBLE, John Phillip, *Macbeth and King Richard the Third: An Essay, in answer to Remarks on some of the Characters of Shakespeare*, London, John Murry, 1817 reprinted London, Frank Cass & Co. Ltd., 1970.
- \_\_\_\_\_, *Macbeth reconsidered; an essay: intended as an answer to part of the Remarks on some of the characters of Shakespeare, 1786*. Eighteenth Century Collection Online Printed Edition, 2010.
- KAHN, Jeffrey, *The Cult of Kean*, Aldershot, Hampshire, Ashgate, 2006.
- MATSUYAMA, Kyoko, "Shakespearian Stage in the Beginning of the Nineteenth Century at London theatre- the Impact of January 1814 -", *Theatre and Film Studies* 2007, vol. 2, Tokyo, 2008,
- MATTHEWS, Brander (ed.), *Papers on Acting*. New York, Hill and Wang, 1969.
- MOODY, Jane, "Romantic Shakespeare", in Stanley Wells and Sarah Stanton (eds.), *The Cambridge Companion to Shakespeare on Stage*, Cambridge, Cambridge University Press, 2002.
- \_\_\_\_\_, *Illegitimate Theatre in London, 1770-1840*, Cambridge, Cambridge University Press, 2000.
- NAGLER, A. M., *Sources of Theatrical History*, New York, Theatre Annual, Inc, 1952.
- NICOLL, Allardyce, *A History of English Drama 1660-1900*, Cambridge, Cambridge University Press, 1965.
- PLAYFAIR, Giles, *Kean: Paradoxical Genius*, New York, E. P. Dutton & Co., 1939.
- SPENCER, Hazelton, *Shakespeare Improved - The Restoration Versions In Quarto and On the Stage*, New York, Fredrick Ungar Publishing Co., 1963.
- WELLS, Stanley (ed.), *Shakespeare in the*

Theatre - An Anthology of Criticism, Oxford,  
Oxford University Press, 2000.

WEST, Shearer, The Image of the Actor, New  
York, St. Martin's Press, 1991.

WHATELY, Thomas, Richard Whatley (eds.),  
Remarks on some of The Characters of  
Shakespeare, London, John W. Parker, 1839,  
reprinted New York, Augustus M. Kelley  
Publishers, 1970. print

WORTHEN, W. B., Drama, Chichester, Wiley-  
Blackwell, 2010

WOO, Celestine, Romantic Actors and  
Bardolatry, Bern, Peter Lang Publishing, 2008